

動物用移動経路における動物の利用実態 ～利用頻度はなぜ上がらないのか～

前河 正昭

志賀高原の国道292号線には冬季オリンピックの自然保護対策として動物用移動経路（エコロード）が6箇所設置されています。それらの野生動物の利用状況の10年間の変化について既存の報告書をもとに調べました。前河（2001）の1998年～2000年の自動撮影の調査では、エコロードを利用した動物はイタチ、テン、キツネ、タヌキ、ニホンザル、ノウサギ、ノネコ、ネズミ科の一種、コウモリ類の1種の計9種で、ツキノワグマなどの大型ほ乳類の利用はありませんでした（図1）。しかし、2002年以降の中野建設事務所の調査では、大型ほ乳類のツキノワグマ、ニホンカモシカを含め、新たに11種の利用が確認されました（表1）。時間の経過とともにエコロードの存在を認知し利用するほ乳類の種数が増えていると考えられます。

このなかで、ニホンカモシカは2002年以降は毎年、低い頻度ながら毎年エコロードを利用していました。しかしツキノワグマの利用は2003年のみで、エコロードの常連の利用者にはなっていないようです。

ハクビシンは2003年以降に出現していました。おそらく、市街地に生息していたものが志賀高原にまで分布

を拡げているものと思われます。これとは逆に、ノネコは2002年までエコロードの主要な利用者であったにもかかわらず、2003年以降現在まで利用が確認されなくなりました。

2002年から2007年までのエコロードの1地点あたりの平均利用頻度（30日の間に何回利用されたか）は0.3～3.7（回/30日）でした（図2）。これらのエコロードが、野生動物のための通路として施工された施設であることを考えれば利用頻度が決して高いとは言えません。

この理由の一つには、野生動物が安全な横断場所を各自で判断し、エコロードを利用せずに道路を横断することができる道路環境にあるということが考えられます。

このような山岳道路では、たとえエコロードだけを無数に施工したとしても、ロードキル（野生動物の交通事故）の件数を減らすことは困難でしょう。依然として続くロードキルを減らすためには、道路を横断しに来た野生動物をエコロードに誘導するための付帯施設を整備することや、自動車の速度制限、動物の横断に注意を喚起するための看板の増設などを組み合わせながら検討する必要があります。



図1 移動経路を利用するタヌキ（2000.9.16）

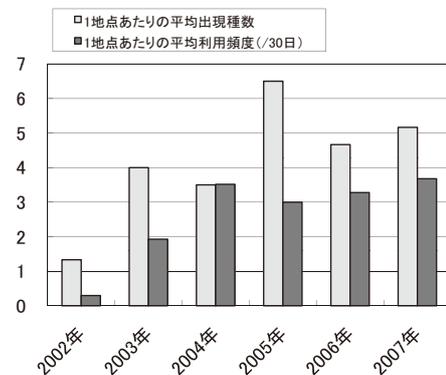


図2 動物用移動経路1地点あたりの平均出現種数と平均利用頻度（回/30日）

表1 動物用移動経路を利用した動物の経年変化

種名/調査年度	1998-2000	2002	2003	2004	2005	2006	2007
アナグマ		○	○		○	○	○
イタチ	○		○	○			○
イタチ科の一種					○	○	
オコジョ		○			○		
カワネズミ					○		
キツネ	○		○	○	○		
コウモリ目の一種	○		○	○	○	○	○
タヌキ	○	○	○	○	○	○	○
ツキノワグマ			○				
テン	○		○	○	○	○	○
トガリネズミ科の一種							○
ニホンカモシカ		○	○	○	○	○	○
ニホンザル	○		○	○	○	○	○
ニホンリス			○	○	○	○	○
ネズミ科の一種	○	○	○	○	○	○	○
ノウサギ	○		○		○	○	○
ノネコ	○	○					
ハクビシン			○	○	○	○	○
ヒミズ					○	○	○
モグラ科の一種							○
出現種数	9	6	13	9	16	13	12